

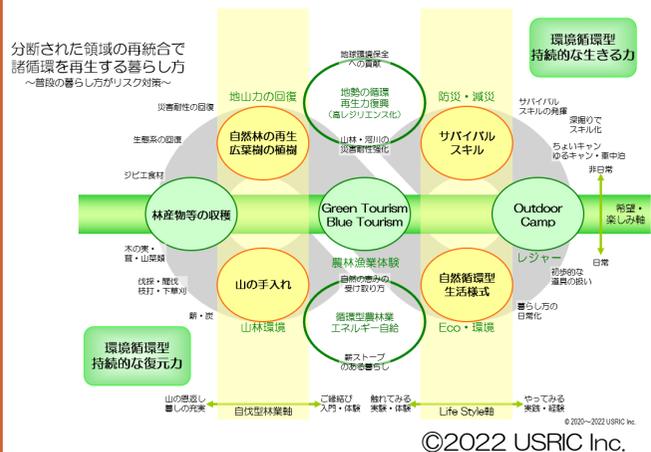
編集室から

地元である能登でグリーンツーリズムを推進している方々からの依頼で、今後の方向性を整理・検討する機会を、数年前に頂きました。

昨今、多発する災害や、新型感染症による避密活動と、アウトドアのスキルは、親和性が高いと思います。また、グリーンツーリズムというと、農業体験に偏りがちですが、山林・里山も欠かせないフィールドのはずです。

これまで、山や田畑からの恵みを楽しむことばかりに意識が向きがちだったグリーンツーリズムですが、いざという時のサバイバルスキルの涵養と、山林の手入れによる地山力の再生で、災害に強い里山づくりを連関させていくと、これまで見失ってきた世界が、見えてくるように思います。

この概念を整理した連関図には、「普段の暮らし方がリスク対策」というサブタイトルを付けました。資源に乏しく、災害に見舞われることが多い、この国では永く日常的に災害につよい地域を造ってきていたはず。その結果、世界的にも稀なほどの豊かさを自然が返してくれてきたと思いますし、独自の民族文化性・自然との向き合い方、暮らし方が育まれてきたのではないのでしょうか。(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラーザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2022/10
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2022/10
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



和歌山県有田川町にて
古民家レストランにて
by hama

寄稿 『COVID-19と共存できるのか?』

サンポート高松クリニック 井垣 俊郎

九月十四日、世界保健機関(WHO)のテドロス事務局長が「COVID-19によるパンデミックは、まだまだ到達してはいないが終焉は視野に入ってきた」と発言しました。我々日本人の目からすると少々気が早いように思いますが、海外の映像ではマスクどころか密集も飛沫も全く気にしない完全に元の生活に戻った人々が世界の主流となったように見えます。

下のグラフは厚生労働省が公表した「新型コロナウイルス感染症の“いま”に関する十一の知識(二〇二二年九月版) https://corona.go.jp/proposal/pdf/chishiki_20220913.pdf」のオミクロン株が流行の主体となった第六波(二〇二二年三月〜四月)の重症化率と死亡率を示したものです。これによると重症化は五十歳代以下では0.03%で六十歳代以上は1.50%、死亡率は五十歳代以下では0.01%で六十歳代以上は1.13%でした。死亡率の格差は百倍を超えています。ちなみに日本のインフルエンザ感染者数は毎年一千万人ほどですが、感染に関連して亡くなる人は多く見積もっても一万人前後と言われています。死亡率にすると、約0.1%です。

パンデミックが始まった当初、私を含めて医療関係者の多くはワクチンさえできれば天然痘やSARSやMERSと同様にCOVID-19感染も終息する(世の中からウィルスがいなくなる)と思っていました。しかし何度も言ってきたように「J-1Tの免

疫をくぐり抜け何度も感染する』『無症状でも他人に感染する』『予想以上に変異が多い』『突然重症化する』など思わぬ性質をもっていたため、もはや如何に共存するかを考えるしかない状況です。共存する上で、どこまでなら許容できるか。その為に、何をすべきか。各国によって事情は様々ですから、私たち日本人なりの落としどころを考えていかなければなりません。

COVID-19から身を守るすべとなるのは、ワクチンと検査と各自の感染防御策と治療薬くらいでしょうか。ワクチンは、様々なウハウが蓄積されてきたので全く新しい変異株が現れたとしても比較的速やかに威力を發揮しそうです。ただワクチンとは「COVID-19が来たぞ」とフェイクニュースで騒がれる、一種のオオカミ少年のようなものです。三回目までは明らかに著効しましたが、四回目になるとやや効きが鈍ってきた印象はあります。免疫は未解明な部分が多く、繰り返しの接種で思わぬ副反応が起きないとも限りません。インフルエンザに対するタミフルのような安全性が高く効果的な治療薬ができれば良いのですが、まだまだ目処は立っていないようです。



【プロフィール】
いしがき としお(金沢大学北浜寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。)



濱の起業塾 四十二『商品開発①』

先月号の末尾で、ストーリー性の高い商品開発が求められていることに触れた。

お土産もの・特産品は、味が美味しいといった「モノとしての特徴」は、もとより、その地域性を表現している必要がある。そうでなければ全国区の商品との単純競争に晒されるだけだからだ。

今ではすっかり有名になった徳島県上勝町の葉っぱビジネス。その担当者から直接お話を伺う機会を今から三十年ほど前に頂いた。講演の柱は、葉っぱビジネスであることは、勿論だったが、余談として彼が触れた上勝町特産のキーウィの販売に関する逸話の方が、当時の自分には衝撃を受けた。

委細は省略するが、店頭でキーウィの効能を説明しながら販促をしていた処、消費者の反応から気づきを得て、パッケージに法令ギリギリの売り文句を入れたものに差し替えたところ、見事に同町産の商品ばかりが手に取られていったそうだ。この逸話か

ら当時すでに消費者は、モノを買っているのではなく、効能を買っていることに気付かされた。

このことを深掘りすると、消費者が求めているものは、モノというより、「モノに込められた何らかの価値である」ということになる。それが効能であるならば、やがてそれは、有効成分とその含有量の勝負となり、商品開発力に勝る大手メーカーの参入とともに、勝敗は決まってしまう。

しかし、「モノに込められた何らかの価値」が、作り手の想いや、風土による独自性の高い物語であるならば、単純な優勝劣敗の流れにはなりにくく、勝機は持続しやすい。

物語を探す際、モノ・J-1T・ヒトの三つが、その源泉となる。成分や効能など、モノの中から見出そうとすると、競争に晒されやすい。祭礼などJ-1Tの中から見出すと、地域性が強くなる。作り手や、関係する人々の中から見いだせるならば、最も独自性が高く、比較競争に巻き込まれにくい価値を紡ぐことができるのではないかと考えている。

青森県のイメージは「りんご」。これはもう異論はないところであろうか。よく青森県を代表する写真に「りんごの花とバックに岩木山の構図のもの」が採用されてきた（青森県東部である南部地方からは評判が悪いが）。30~40年以前は、ざっとりんごの生産量が全国で100万トン、青森県がその半分の50万トンと覚えたものである。

昨今は、タレントの王林さん（弘前市の地元アイドルグループ「りんご娘」のリーダー、王林はりんごの銘柄の一つ）の活躍と青森への愛、埼玉西武ライオンズ外崎選手の実家がりんご園で「アップルパンチ」のタオルによりスタンドで応援するファンの姿が見受けられる。

しかし、いまやりんごの出荷量は2021年度の全国で約60万トン、1973年以降で2番目に少なく、結果樹面積も前年から1%減となっている。農水省によると「りんごは不足感が常態化し、需要に対し供給が十分でない状態」なのだという。いかに生産が落ちているかが表れている。そして、昨今の物価高。近所の秋田市東部の食品スーパー群でも銘柄にもよるが、1個あたり140~150円ほどで昨年より値上がりしている。

そこに昨年と今年は雪が多く雪害の影響もあり、さらに青森県津軽地方（秋田県北地域も）における8月3日、9日の2度の大雨である。その影響で多くのりんご畑も水没など影響を受けた（★10/1現在、JR五能線の運休（岩館~鯉ヶ沢）、JR奥羽本線の一部バス代行運転（鷹ノ巣~大館）などが続いている）。岩木川流域6自治体のりんご園の被害額は13億1,000万円にもなる。かねてからの農家人口の高齢化や後継者難などの問題、そこに度重なる自然災害により立ち直る余力が残されておらず、りんご経営を辞める農家がかかり出てきている。りんご園をゼロから再開するには何千万円もかかるのである。風などで落果したりんごは加工用に回るが、生食の比でない値段でりんご加工業者に引き取られる。1991年の台風19号ではほぼ「りんご」が全滅の被害を受けたことに対し、「りんご」だけに頼らず「桃」の生産に取り組む農家も出てきている。「桃」が「りんご」より風に強く、夏に痛みにくいこともあるようだ。今では津軽地方において「桃」が「りんご」の1割ほどの作付面積があるという。このように「りんご王国青森」も諸状況から徐々に変容してきている。

同様に水産物に目をむけると、筆者は「ブリ」「サワラ」といった魚は、青森県に居住していた18歳以前は食したことはなかった。「ブリ」「サワラ」などは、関東・北陸以南の魚であり、青森県に限らず東北地方ではほとんど食べられていなかった。

しかし、いまでは先のスーパー群でも、「ブリ」が「イワシ」「サバ」「サンマ」などの大衆魚よりも価格が一番安い。産地は青森県、秋田県などの近海もので、当初は驚いた。北海道でも「ブリ」が大量に水揚げされているが、札幌市場ではあまり売れないようである。そもそも「ブリ」を食べる食習慣がないためいくら低価格でも売れないのである。海水温の上昇などによる海環境変化により、これまで生息していた魚種に大きく影響しているようだ（特に1898~2017の海水温の上昇 日本海中部が+1.19℃と世界平均+0.54℃よりも高いとの研究もある）。

このように農水産物とも、これまでの地域の特産品・名産品が形を変える、品を変える、または産地が衰退・消滅することへの対応をしていかなければならない。

2021年8月号で「50歳目前で資格取得にはまっています」というタイトルの元、衰えていく脳に鞭打つ勉強の日々が1年経過した結果の報告と、無事五十路を迎え、さてこれからどうするか?という展望について備忘録かねてつらつら書いていこうと思いますので、お付き合いくださいませ。

昨年8月の段階では、これからの1年で宅建士と中小企業診断士を受験するということでした。現段階の結果で言いますと

『宅地建物取引士』

無事合格し、免許発効前の事前研修も受けて、現在フリーの宅地建物取引士として活動しております。全国どこにいても、すべての物件を紹介し取引できるので、群馬から新潟方向でワーケーション物件探しを兼ねた旅を予定しています。

『中小企業診断士』

先月に受けた一次試験に無事合格し、現在は今月末の二次試験に向けて準備中です。一次試験の7科目という範囲の広さに苦闘しましたが、二次試験の4科目が記述式であること（必殺鉛筆コロコロは使えない）、そして7科目のより深い理解力と設問で出てくる業界知識が必要なので激ムズです。でもここで取っておかないと、一年後まで今のモチベーションが続くか自信がないので、現在第四コーナーで激しく鞭を入れております。

と現在のところ、取得に関しては想定以上に順調にしているのですが、資格があるだけで飯が食える時代ではないので、ここから何を成し遂げるためにこのパスを使っていこうかというところを考えねばなりません。正直これまで取ることだけに執着し勉強していたので、ノーアイデアです。

（つづく）

『相模の国から ～大魔神のたび～』 福岡県築上町のこと その2
茨城県境町 参与 溝口 久

中に入るとグレイの大理石に式台には蛇の目石が使われている。正面には床の間、すでに書院造りの間。格天井に柱目の天井板がリズムカルに木目を交互にはめ込んでいる。欄間は最も格式高い箴（おさ）欄間だ。さて、十二畳の玄関広間を抜け、右手のガラス障子越しに百日紅の花が咲く主庭を眺めながら進むと明治時代に建てられた応接間に至る。この応接間は約三十畳の広さがありガラス障子越しに主庭をのぞみ圧巻。付書院の組子障子は緻密かつ繊細で当時の建具職人の技に唸る。この応接間の西には同じく主庭に面する茶室がある。これは抹茶を嗜む侘び茶の草庵茶室とは異なり、中国風の煎茶道のための茶室だ。窓を開け放ち主庭の風景をのぞむ開放的な茶室になっていて、中でも中国風の円窓が印象的。主庭の西側に面して大正時代建てられた大広間がある。初めて見る弓型天井の東と北の畳縁側を含めると50畳にも及ぶ大空間に圧倒される。



さらにこの大広間の西側には来客用のモダンな西洋デザインと数寄屋様式がミックスされた風呂場・洗面所・雪隠、そこに貼られている古代地中海風タイル。そして茶室のような脱衣所があり主庭の池に続く枯流れの起点となる山燈籠が据えられた庭が付属している。



仏間の壁には金唐革紙（きんからかわし）が貼られ豪華の一言。多くの部屋を繋ぐ廊下の天井は掛込天井や船底天井で、豪華な欄間彫刻には目を見張るばかりとなっている。また、竹を模した銅製の雨樋も見もの。

庭に出てみる。表門の右横の中門から主庭に入り望む大玄関・茶室・大広間は完璧かつ美しい雁行形をとっており、大正時代の大増築により完成したものである。

蔵内邸は表から見える部分はすべて格式高い和風建築で統一しているが要所要所に西洋スタイルを取り入れている。豊門会館明治以降の資産家の屋敷には目立つ場所に応接間として立派な洋館が建てられるのが当前の時代にあって蔵内家はその流れに完全に背を向けているように見える。それどころか応接間の天井は武家屋敷の特徴である「床挿し」の設え、これは蔵内家がかつとも武家の家系であったことを示すものだが、武士の時代が終わった明治時代にあろうとも、そしてたとえハイカラな西洋スタイルを暮らしに取り入れながらも、日本人としての誇りに強くこだわりが見え、それこそがこの旧蔵内邸の美しさの根幹となっている。



現地には案内している方が常駐し、一時間程度の邸内巡りの後には煎茶と和菓子のもてなしが用意されている。これほど至福な時を過ごせる処はそうそうない。訪問を強く勧めたい「旧蔵内邸」である。

さて、地域づくりアドバイザーの肩書をお願い毎月羽田から北九州空港に飛ぶことになった。2006年に合併したこの町は、昨年新庁舎が建てられた。真新しくスペースに余裕があり気持ちがいい。自席もしっかり用意されている。持ち込んだPCは自由にネットにつながり職員用プリンターも使えるようにしてくれている。3日間と言っても初日役場に着いて11時、最終日も15時には役場を後にする。そのまま帰ることはなく知人を訪ねさらに一泊するのが常になっている。

出勤中は現地打合せ、企画内容の職員との打合せ進め方検討。三日の間にまとめを必ず作成し、情報共有、町長報告といった流れである。非常勤で自治体の仕事に関わるのは初めて。どこまでできるかは年度内には見えないだろうし、それにより来年度どうなるか？来年3月末には静岡県を辞めることなく定年そして再任用されていたとしても終わりとなる時期だ。「なりゆき任せ」でここまで来た、4月以降もそうなるだろう。

どこの自治体に行っても共通して取組む課題がある。だぶつき気味そして時代に合わなく老朽化していく公共施設をどうするかだ。建築の知見と地方創生事業を駆使して再生したい。そこが腕の振るいどころだ。

(了)